
for the hustle and bustle in the castle ?

暮音孤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

May I get angry for the hustle
e and bustle in the castle?

【Zコード】

N8144P

【作者名】

暮音孤

【あらすじ】

既成とは一味くらいは違う吸血鬼の話。

横ながぶりの雨がいつまでも降り続いていた。怪しく立ち込める黒い雲からは、雷が空を引き裂いては海面を騒ぎたてた。

そして、ついに稲光はそれを闇夜に浮かび上がらせる。

断崖絶壁に建つ、小さな城。小さいとはいえ、二つの尖塔を構えるその城は石を煉瓦を積んで造られていた。

永く人の手入れが行われなかつたらしく、その跡はまるで見当たらない。ずっと放置されていたのだろう。

その上、壁面を薦が根を張りめぐらせている。窓には格子は無く、風が雨がその中に吸い込まれていた。そんな城に何の前振れなく、明かりが灯つた。ぼう、ぼう……、と並びにならつて燭が城内を照らし始めた。そして、何やら話し声まで。

「お帰りなさいませ、旦那様」

「つむ。私の留守中に変わつたことは?」

「いざいません」

「……ほお?」

声は一つ。言葉の節々から、さうと容易に伺える城の主と一寧に受け答えする遺れる者のものだ。

「如何なさいましたか、旦那様?」

「『如何』も『旦那様?』でもない」

「はあ?」

「『はあ?』でもない! 何だ、この雨漏りは」

漆黒の外套を纏つた男は天井から落ちる雨垂れを指差しながら、とぼける男を問い合わせる。

しかし男は主人の指先を見た上で堂々と答えた。

「はい。水分を取り入れることで、城内の湿度を適当にしているのです」

「イアルトウンクよ。セメントをかき混ぜるだけの力が無かつたとは言えないのか？」

「言えません」

「……。その頑固で強情なところはセバスチャンだな

「セバスチャン……？ ああっ、私の前の執事ですか」

「そうだ。今は亡きエルンケイプ博士が特許料を収め、合法的にフランケンショタインを創造した際に材料となつた、な

「言つて恥ずかしくありませんか、旦那様？」

「貴様の生い立ちを話してやつているのに、黙つてきけないのか」

「しかしエルンケイプ様。ドラキュラの真祖として、『自分は存命では？』

「真祖は博士か？ 違うであろう。博士は死んだのだ」

「ならば休みを頂きたく」

「それは借金完済後と契約済みのはずだが

「では、『旦那様』をやめましょ」

執事は名案を思いついたとばかりに言つ。

「では、これから何と呼ばれるのだ？」

「奥様もいらっしゃらないのに、『旦那様』は失礼でした」

カツコツと靴音を挟み、イアルトウンクは恭しく話す。エルンケイプは訝しむ。

「だから？」

「『独り身様』」

「却下だ。第一、妻なら居るわ

「！？」

イアルトウンクは驚きのあまり、執事の立場を忘却の彼方へ投げ捨てた。

「妻子がいたのかよ、貴様！」

「ほう。それが内心か」

「内心などと。本心ですよ。当然でしょうが？」

「余計に駄目だろう。だが」エルンケイプは恐る恐る執事に問う。

「おかしいが、妻がいては？　真祖としてはどうあるべきであれどか？」

イアルトゥンクはそれをあえて無視。執事の分際で主に訊いた。

「それで、どうなのですか？　鈍感な旦那様ゆえ、ストレートにお訊ねしますが、『愛しているのでしょうか』」

「……あ、愛してあるよ。当たり前だ！」

エルンケイプは途端に顔色を青白くさせて、語氣強く断言した。

「それでは、旦那様は浮氣を！？」

「しておらんわ！　大体、貴様も知つておらひ、生き血のすすりようがないことくらい」には

エルンケイプは不機嫌に言い放つ。それもそのはず、彼は前歯の欠けた真祖。吸血鬼のくせに犬歯が鋭くないのだ。

「ですが、処女の生き血は飲んでいらっしゃるのでしょうか？」

「それも心配ない」

よくぞ訊いてくれた、とばかりにエルンケイプは真祖に重ねがちな厳かな雰囲気を一笑に臥した上で、弾丸トーキいや旦を見開いて語つた。

「イアルトゥンクよ。その前に、真祖が一汁一妻だと誰が決めた？　多妻に決まつておらう。ま、まあ正妻への愛に偽りはないがな。いえ、愛しています！　貴女がいなくば、この生も無意味！　貴女と出会つて、真祖になつたのだ！」

執事は主の形相に圧倒されつつも、一言だけ返した。「どんな愛妻を恐れているのです？」

田が語る、「そげん恐ろしかこと、やくでねえ」と。出身がバレそうな勢いだ。

城の主は漆黒の外套より女を抱え出すや、誰ともなく言つ。

「今宵は宴だ！　主の帰りを態度で示すがいい！　正妻を器に盛りつけよ！」

そして、なおも傍らにいる執事に答えた。

「彼女こそ正妻だ」

「女……の子？ 人間？」

エルンケイプが抱えていたのは、そう言ひにふさわしい背格好をした少女だった。

イアルトウンクは思わず泣いた。

「まさか口リコンだつたなんて！」

「非力なデカブツ執事は洞察力すらないのか。セバスチャンなら、看破していたぞ」

「私はイアルトウンクです！」

「脳筋に指摘されんでも分かつているわ！」

「ともかくも、エルンケイプは抱えた少女の素性を教えてやる。名前はマドカ。旅先の街道ですれ違つて、だな。その……」

「？」

「一目惚れだつた、」

それは真祖たる一角の人物が吐く言葉ではなかつた。さらに、「ごによごによ」と続く一部を耳にしたイアルトウンクは猛然と怒つた。

「人ざらい、あるいは人身売買は口リコン趣味からか！」

対するエルンケイプは大いに憤つた。

「何を言うか！ 徒者を妻にすることくらい、前例が山とあるだろうが。そもそも――」

「つるさ――――い！」

突然、エルンケイプの脇辺りから大声量。ぼてつ。

彼は思わず耳を塞ぐと、弾力のあるものが落ちる音が鈍く響いた。

「……いたたたたた」

音の方に目を向けたイアルトウンクは見た。

「首が変な方向に！？」

「南無！」

エルンケイプは見もせず、合掌。旅先の仕草と言葉を真似する。

「いや、死んでないから」

首の捻りを自力で治しながら、少女マドカは覗き込んでいた執事

に突っ込む。

「グハツ」

苦笑いを浮かべる主人に、執事は金的を蹴られて悶絶。

「あんた！ ダーリンに失礼なことを言い過ぎよ」

「ダーリン？」

「そう。あたしの一目惚れを自由吸血権と引き換えに受け入れてくれたダーリンよ！」

「お、お前……の、……かよ」

イアルトゥンクは恐らく潰れたであろう下腹部よりも下部を押さえて頑張る。

エルンケイプは小声で弁明する。

「だから、宴の主菜として食べようと眠らせていたのだ、それを「そして、ようやくイアルトゥンクは主人の弱腰の理由を理解した。しかし、理解した時には後の祭りになつてゐるのはよくある」とだ。

「ところで、今は何時？」

内股に立ち上がる執事に、少女が偉そつと訊く。

「深夜2時くらいですが」

「大変！ 早く寝なきゃ！ あたしの寝室は？」

「は？」

「無いなら、ここで寝るわよ！ 騒いだら、一度とうるさく出来ないよう口を縫いつけるからね！ いい？ 反事は？」

どうやら、主人の弾丸トークがこの少女の影響であることを理解しながら、執事は言つ。

「密室に案内致しましょう」

「早くしてよ」

少女は歩き出す執事の後を追う。一方的に話すが、内容に遠慮は皆無だった。そもそも、遠慮という言葉を知っているのかどうか。

「でも、騒いだら犯人に制裁を加えるからね。返事は？」

イアルトゥンクにしては笑うほかなかつた。彼女は少女の皮を被

つた人間なのだ。

「イエス、マスター！」

「マスターはダーリン！ 返事は眞面目に言いなさい！」

「し、失礼致しました、マダム！」

「『若奥様』とお言い！」

「若奥様！ こちらが寝室で御座います」

「うん。よろしいでしょつ」

「お休みなさいませ、若奥様！」

そして、少女の言葉を聞かないで、イアルトウンクはその場を跡にした。

その晩、宴は盛大に行われた。だが、主と従者の姿はなかつたといふ。

「くおらつ！ 夜更かしはお肌の大敵だつて、何度言えば分かるの！ うるさい口はこの口か、ラッパのようなけたたましい口は縫つてやる、ここに並ぶ全部の口を縫つてやるんだから！」

微睡みの中、エルンケイプとイアルトウンクは口を縫われるものたちの阿鼻叫喚を幾度となく聞いたとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8144p/>

May I get angry for the hustle and bustle in the castle ?

2010年12月30日12時25分発行